

「情報構造と名詞述語文」ビルマ語データ

トゥザ ライン, 岡野 賢二

本稿はアンケート「情報構造と名詞述語文」に答える形でビルマ語の例文を列挙し、簡単な解説を加える。¹

[1] 「えっ、コーコー [／固有名詞なら何でもよい、以下も] が来たの?」「いや、コーコーじゃなくてニーニーが来たんだ。」²【対比焦点(主語)】(例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

A-1³ hìn, kòkò là(=tʰwá)=tè.
EXCL NAME come(=go)=VS:RLS

A-2 (hou?=lá)
(right=Q)

B-1 mǎ-hou?=p^hú, mǎ-hou?=p^hú, kòkò mǎ-hou?=p^hú.
NEG-right = VS:NEG NEG-right = VS:NEG NAME NEG-right = VS:NEG

B-2 jìjì là(=tʰwá)=tə.
NAME come(=go)=NC:RLS

A-1 は形式的には平叙文でありながら、文末が上昇調になり(普通は低平調で自然下降する)疑問文相当となる。上昇調になる場合は疑問であることが分かるため、A-2 hou?=lá “is it right?”は発話されなくてもよい。なおビルマ語では統語的に疑問が表示された場合、決して上昇調にはならない。

B-1 で mǎ-hou?=p^hú “it is not right (≡ “No”)”は繰り返されて強く否定された後で、kòkò mǎ-hou?=p^hú “it is not Ko Ko”と焦点否定される。B-2 は述語が名詞化標識=tə⁴となる、いわゆるノダ文(stand-alone nominalization)となる。

¹本稿は日本語例文をトゥザラインがビルマ語訳をし、音声表記とグロスを付加した(岡野が監修)。解説は岡野がトゥザラインと協議の上、主として岡野が執筆した。本学大学院博士後期課程。女性、37歳、バゴー管区ミインフラ市生まれ、5歳からヤンゴン在住、在日歴7年、日本語能力試験1級(旧)およびN1に合格している。

²コーコー kòkò, ニーニー jìjìは斜格形(oblique case form, OBL)をとり得る人物指示名詞(personal referent (Okell 1969))である。

³本稿では話者をそれぞれA、Bとし、枝番はその中の発話の番号とする。例:A-1(第1話者の第1発話)

⁴名詞化標識=təは〈確定〉の動詞文標識=tèと形式名詞=hà「(もの)」が融合した形式。(未確定)のムードでは動詞文標識=mè, 名詞化標識=hmàとなる。

なお「来る」がビルマ語で là(=ṭwá) ‘come(=go)’となっているが、ṭwá ‘go’が現れない場合は単に「来た」というイベントのみを表し、ṭwá ‘go’が現れた場合は「来てその後立ち去った(この場にはいない)」というイベントを表す。この ṭwá ‘go’は随意的に有声化する。

[2] 「誰が来た(の)?」「コーコーが来たよ。」【WH 焦点(主語)・WH 応答焦点(主語)】

- A-1 bǎḍù là = ṭà = lé.
 who come=NC:RLS=Q
- B-1 kòkò là = ṭà.
 NAME come=NC:RLS

A-1, B-1 ともノダ文を用いている。ノダ文は通常、発話の前提として当該の命題が真である。

[3] 「コーコーの方が大きいんじゃないの?」「いや、コーコーじゃなくて、ニーニーの方が大きいんだよ。」【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】(コーコーとニーニーの背について話している状況で)

- A-1 kòkò = k̄â pò = cí = ṭà mǎ-hou? = p^hú = lá.
 NAME=NOM more=big=NC:RLS NEG-right=VS:NEG=Q
- B-1 mǎ-hou? = p^hú, (kòkò mǎ-hou? = p^hú.)
 NEG-right=VS:NEG NAME NEG-right=VS:NEG
- B-2 nìjì = k̄â pò = cí = ṭà.
 NAME=NOM more=big=NC:RLS

やはり A-1, B-2 ともノダ文を用いている。

[4] [電話で]「どうした(の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」【文焦点(自動詞文)】

- A-1 bà p^hyi? = lô = lé.
 what occur=*because*=Q
- B-1 bà = hmâ mǎ-p^hyi? = p^hú.
 what=*any* NEG-occur=VS:NEG
- B-2 (?ǎḡû) ?êḍê yau? = là = lô.
 (now) guest arrive=come=*because*

A-1 の bà p^hyi? = lô は単独なら「なぜ」を表す疑問語であるが、ここでは構成的に「何が起きた故にか?」という意味。電話中に前触れなしに会話が一方的に中断されたような状況を想定している。B-2 はこれに対応する形で、単純接続・理由節標識 lô によって導かれる節が述語となっている。大西(2014)が指摘した、いわゆる「言いさし文」と見てよい

だろう。

[5] 「あの子供がコーコーを叩いたんだって!？」「いや、コーコーじゃなくて、ニーニーを叩いたんだよ。」【対比焦点 (目的語)】

- A-1a. ?ê=k^hälé=kâ kòkò=kò yai?(=lai?)=té.
 DEM=child=NOM NAME:OBL=ACC hit(=*thoroughly*)=VS:RLS
- A-1b. ?ê=k^hälé=kâ kòkò=kò yai?(=lai?)=lô.
 DEM=child=NOM NAME:OBL=ACC hit(=*thoroughly*)=*because*
- B-1 mǎ-hou?=p^hú, mǎ-hou?=p^hú, kòkò=kò mǎ-hou?=p^hú.
 NEG-right = VS:NEG NEG-right = VS:NEG NAME:OBL = ACC NEG-right = VS:NEG
- B-2 nìjní=kò yai?(=lai?)=tà.
 NAME:OBL = ACC hit(=*thoroughly*)=NC:RLS

A-1a, A-1b はいずれも上昇調になる。A-1b は単純接続・理由節標識 lôによって導かれる節が述語である。ただしこれは理由を表している訳ではない。

B-2 はやはりノダ文。

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う (の) ?」「(私は) 青い袋を買うよ。」【対比焦点 (目的語, 特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

- A-1 ?āni-[?]ei?=nê ?āpyà-[?]ei? hyî=tè.
 red-bag=COM blue-bag exist=VS:RLS
- A-2 bè=[?]ei? wè/yù=mǎ=lé.
 which=bag buy/take=VS:IRR=Q
- B-1 (ŋà=kâdô) ?āpyà-[?]ei? wè/yù=mè.
 I=*contrast* blue-bag buy/take=VS:IRR

目的語の対比焦点となる B-1 は、主語要素の脱落も含め、ビルマ語の最も一般的な語順と変わることがない。

[7] 「コーコーはどうした?」「コーコーは朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点】(例えば、朝少し遅く起きて来た一郎の父親が、姿の見えない一郎について母親に尋ねている場面で)

- A-1 kòkò (tǎ-yau?) bè pyau?=nè=lé.
 NAME (one-CLF) where disappear=stay=Q
- B-1 kòkò mǎnɛ?=téǵâ ?āpyìN t^hwɛ?=t^hwá=tè
 NAME morning=since outside go.out=go=VS:RLS

A-1 の(tǎ-yau?)「ひとり」はあった方が自然。bè「どこ(へ)」はこの文の中でどのような

統語的な位置を占めているのか不明。bèは無標で現れると通常は着点を表すが、動詞連続 pyau?=nè「消えている」は着点を取らない動詞と考えられるからである。⁵ B-1 はビルマ語の最も一般的な語順と変わらない。

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

A-1	(hò=k ^h älé)	băđú=ḵò	yai?=lai?=tà=lé.
	(that=child)	who.OLB=ACC	hit= <i>thoroughly</i> =NC:RLS=Q
B-1	(??hò=k ^h älé)	tû=jì-lé=ḵò	yai?=lai?=tà.
	(that=child)	3.OBL=y.brother=ACC	hit= <i>thoroughly</i> =NC:RLS

A-1, B-1 ともノダ文である。B-1 に「(あの子供は)」が現れるのは自然ではない。

[9] [電話で]「どうした(の)?」「うん、一郎が(自分の)弟を叩いたんだ。」

【文焦点 (他動詞文)】(例えば、電話の向こうで子供の泣き声が起きたのを聞いての発話)

A-1	bà=ṭwè	p ^h yi?=nè=tà=lé.	
	what=PL	occur=stay=NC:RLS=Q	
B-1	bà=hmâ	mă-hou?=pà=p ^h ú.	
	what= <i>any</i>	NEG-right=PLT=VS:NEG	
B-2	kòkò=ḵâ	(tû=jì)-lé=ḵò	yai?=lai?=lô.
	NAME=NOM	([3']=y.brother-DIM=ACC	hit= <i>thoroughly</i> = <i>because</i>

A-1 は[4]とよく似た状況だが、進行相を表す補助動詞 nè「いる」が現れている。[4]が瞬間的な出来事について述べているのに対し、ここは子供の泣き声が継続的に聞こえているためである。B-2 は理由節が述語となっている点で[4]と同じ。A-1 の質問文が事実上、理由を訊ねるものであるからであろう。

[10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは)一郎が食べちゃったよ。」

【目的語主題化、主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

A-1	hò=kei?môun	bè	yau?=ṭwá=lé.
	that=cake	where	arrive=go=Q

⁵ 査読者から pyau?=nè「消えている」が「(別の場所に)行く」という意味である可能性はないか?との指摘を受けた。これは二つの動詞 pyau?「消える」と nè「居る」からなる動詞連続だが、前者の用法として着点を取る例は今のところ(本例文のような例を除き)見つかっていない。また後者は移動動詞ではないので着点を取ることはない。よって動詞連続全体であっても、着点の項を取ることは考えにくい。

B-1 ?á, (kei?môun = lá.) kòkò sá = pyi? = lai? = pì.
 INTER (cake=Q) NAME eat=*quickly=thoroughly*=VS:INC

繰り返して述べているように、文脈等から復元可能な要素は脱落してよい。

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」【分裂文】

 nà mǎnêgá sà?ou?-s^hàin = kâ wè = là = tà dī = sà^oou? = lè.
 1 yesterday book-shop=ABL buy=come=NC:RLS this=book=SFP

ビルマ語の分裂文は擬似分裂文となる。擬似分裂文の前提は名詞化節によって導かれる。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」【措定文 主題（名詞述語文の主語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

 ?édī = lù = kâ s^hǎyà = lè. dī = cáun = hmà lou? = nè = tà
 DEM=person=NOM teacher=SFP DEM=school=LOC work=stay=NC:RLS
 tóun-hni? hyí = pì
 three-CLF exist=VS:INC

第二文は経過時間を表す構文。[elapsed-time]には経過時間を表す数表現が入るが、主動詞が cà- “to elapse”の場合はなにも現れず「随分と時が経った」という意味になる。

... (mǎ-)V = tà [elapsed-time] hyí = pì./cà = pì.
 ... (NEG-)V = NC:RLS exist=VS:INC/elapse=VS:INC
 ... V して (V せずに) [elapsed-time]になる/随分と時が経った。

第二文は「(～が)...V したこと/...V しないこと」という命題が名詞節として文全体の主題になっている。つまり第二文に現れていない「あの人は先生」は第二文の補文の主語ということになる。

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【倒置指定文】

A-1 tû = ?ǎp^hè = kâ hò = tǎ-yau? = lè tû = ?ǎp^hè = kâ ?édī = lù = lè
 3:OBL=father=NOM DEM=one-CLF=SFP 3:OBL=father=NOM DEM=person=SFP

倒置指定文の主語は主格助詞 kâが必須となるようだ。

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【指定文】

A-1 hò = tǎ-yau? = kâ tû = ?ǎp^hè = lè / ?édī = lù = kâ tû = ?ǎp^hè = lè.
 DEM=one-CLF=NOM 3:OBL=father=SFP DEM=person=NOM 3:OBL=father=SFP

[15] 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」【定義文】

ḍäbɛʔkʰä sʰò = t̄ä mǎnɛʔpʰàn = yê nauʔ = t̄ä-nê = k̄ò
the.day.after.tomorrow say=NC:RLS tomorrow=GEN next=one-CLF=ACC
pyó = t̄ä = lè
speak=NC:RLS=SFP

定義文は定義される対象の語句を sʰò = t̄ä 節「～というの」で取って文の主題となり、定義内容が題述部分に現れる。動詞 sʰò 「云う」には通常、引用節標識 l̄ə が現れない。

[16] 「何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて」「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

cǎnò = k̄ä k̄òfi = p̄ä.
1m⁶=NOM coffee=PLT

日本語と同じくウナギ文を用いるが、自然な表現とは言いがたい。主格助詞=k̄ä の生起はほぼ必須である。

[17] 「注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに」「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

k̄òfi = k̄ä cǎnò = p̄ä.
coffee=NOM 1m=PLT

日本語と同じく逆行ウナギ文を用いるが、自然な表現とは言いがたい。主格助詞=k̄ä の生起はほぼ必須である。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

- a. ʔédí = sàʔouʔ-ʔǎtiʔ-ʔǎtʰù-čí = k̄ä zé + cí = t̄è.
that=book-new-thick-AUG=NOM expensive=VS:RLS
- b. ʔédí ʔǎtiʔ tʰweʔ = t̄è sàʔouʔ-ʔǎtʰù-čí = k̄ä zé + cí = t̄è.
that new go.out=ATTR:RLS book-thick-AUG=NOM expensive=VS:RLS

a. は sàʔouʔ 「本」、ʔǎtiʔ 「新しいの」、ʔǎtʰù-čí 「分厚いの」が同格名詞として並列されていると考えられる。ただし指示詞 ʔédí 「その」は sàʔouʔ-ʔǎtiʔ-ʔǎtʰù-čí 「新しくて分厚い本」全体を限定しているように思われる。

一方 b. は sàʔouʔ 「本」と ʔǎtʰù-čí 「分厚いの」のみが同格名詞として並列されていて、それに指示詞 ʔédí 「その」と限定節 ʔǎtiʔ tʰweʔ = t̄è 「新しく出た」のいずれもが同格名詞全体を限定していると思われる。

⁶ 1m の m 男性話者 (male speaker) を表す。

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性 (mirativity)】

A-1 ʔè, ḍǎjá kòuN = nè = t̃è = há.
INTER sugar run.out=stay=VS:RLS=SFP

意外性は終助詞 háによって表されていると思われる。発見にはノダ文は用いられないかも知れない。

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！ 田中君だったな。」【思い出し】

nânèbáin tǎ-yauʔ-yauʔ = nè twê = p̃hò hyî = tǎ = lò = pé.
evening one-CLF-CLF=COM meet=for exist=VS:RLS=ESS=FOC
bǎḍù = nè = myá = p̃aléin. ʔá, t̃í = p̃ì.
who=COM=or.something=wonder⁷. INTER know=VS:INC
miʔsǎtà tǎnàk^hà = nè twê = p̃hò c^héin = t^há = t̃à.
NAME=COM meet=for make.an.appointment=put.on=NC:RLS

ビルマ語は基本的に文脈などから復元可能な要素は（一部例外を除き）脱落可能である。

参考文献

欧文

Okell, John. 1969. “A Reference Grammar of Colloquial Burmese”, Oxford University Press: London.

和文

大西秀幸.2014.「日本語とビルマ語において原因・理由を表す助詞の表す意味範囲に関する対照」, 第22回ビルマ研究大会（上智大学, 2014年4月19日）.

⁷ p̃aléin は非動詞述語文に現れる唯一の法（ムード）《自問》「～かしら？」を表す助詞。動詞要素ではない。

